

42 我が街 船橋を歩く 船橋の魅力(13)

—成田詣の宿場町・船橋宿—

29期 仲田 元昭

今回は、江戸時代に庶民に広がった成田詣の宿場町として栄えた、江戸と下総・上総との交通の要衝（江戸日本橋から小名木川と陸路で本行徳村からの行徳道が上総道と合流し、木下街道と東金御成街道と成田道に分岐）、船橋宿の歴史を振り返る街歩きのご案内です。

「成田詣」の歴史

成田参詣とは、「成田詣」とも言われ、江戸から成田山までの参詣を意味し、江戸時代中期に起こった成田山新勝寺への個人参詣で、江戸で人気の歌舞伎役者だった市川團十郎が成田不動に帰依して「成田屋」の屋号を名乗り、不動明王が登場する芝居を打ったことや、江戸から近接な距離であったこともあり、庶民の信仰を集めました。

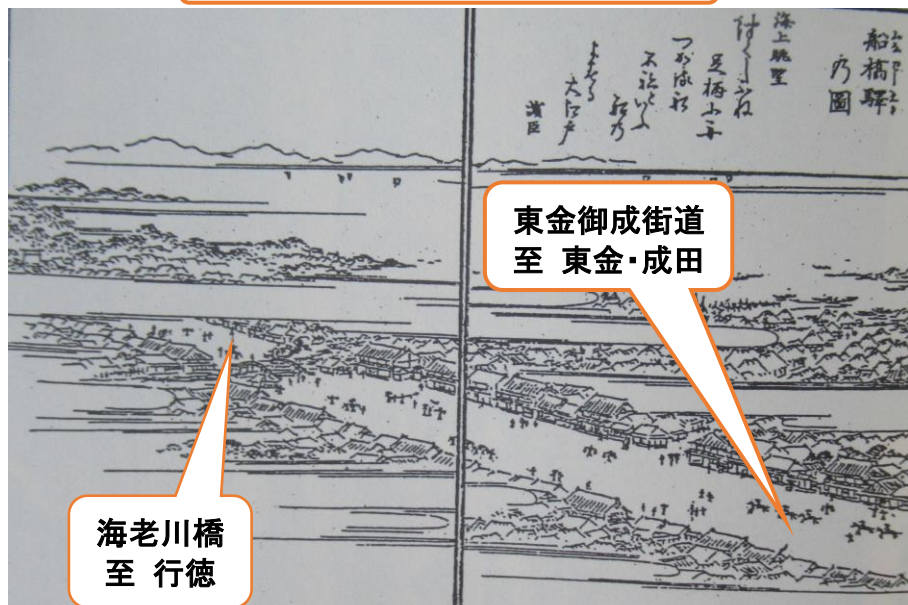
「参勤交代と成田詣の宿場町 船橋」

江戸庶民の旅行を兼ねた庶民の信仰とし「成田詣」がブームになり江戸からちょうど1日目の宿が主に船橋宿でした。船橋宿は、海神村、九日市村、五日市村の三か村の総称で、宿には、大名や役人、公用旅行者の為の本陣が1軒あり、継立業務を行う役所（問屋場）^{といやば}が置かれ、荷物を次の宿まで運ぶ勤めがあり、必要な人馬を常にそなえていました。（伝馬制度）毎日人15人と馬15頭を準備していました。

「船橋宿の規模」

宿の中心は、九日市村で、寛政12年(1800)11月「村鑑明細書上帳」によると、本陣、問屋場のほか、荒物商、八百屋、万商、穀物屋、豆腐屋等商店が55軒、五日市村も11軒の商店がありました。宿泊場所は、九日市村だけに認められ、近江屋、大和屋、大津屋、海老屋、佐渡屋、紀の国屋等22軒の旅籠屋がありました。文化15年(1818)に25軒、天保2年(1831)に29軒、江戸末期には30軒以上の旅籠屋があり、大変賑やかな街でした。

「船橋駅乃図「成田参詣記 卷三」



「嘉永7年(1854)船橋市西図書館所蔵」

(参考図書：船橋のあゆみ 市郷土資料館)

「43 我が街 船橋を歩く 船橋の魅力(14)に続く」 「2024-5-1 寄稿」